

---

# 因果の彼方より救世主は来たる

Zwei

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

因果の彼方より救世主は来たる

### 【Nコード】

N2342P

### 【作者名】

Zwei

### 【あらすじ】

『彼』は巻き込まれた被害者だった。

『彼』は逃げ出した罪人だった。

『彼』は命を摘み取った加害者だった。

だが、それ以上に……

彼は救世主だったのだ。

それは、とてもちいさな

とてもおおきな

とてもたいせつな

ふたつめのあいとゆうきのおとぎばなし

プロローグ(前書き)

2010/12/30 誤字修正

## プロローグ

「もうここまでか」

狭いコックピットの中で『彼』は呟く。

機体は脚部を破壊され、立つ事もままならない。

今の様を亡くした彼女達は何と言うだろうか。

尊敬すべき先達。

共闘した仲間達。

そして……護るべき恋人。

彼女らを亡くして十余年の月日が経過していた。

順番が回ってきたのは自然の摂理だろう。

『大佐！』

不意に通信が入る。

『彼』の部下達だ。

網膜投影された地図にはまだ三機のマーカーが表示されている。

三人が三人とも十年以上苦楽を共にした仲間だ。

それを見て微笑む。

まだ仲間は生きているのだ。

これまで共にいた科学者と、ある少女はこの世にもういない。自分の事を語り伝えてくれる人間が三人もいるのだ。

ああ、俺はなんて幸せ者なんだろう。

『彼』は最後の命令を下す。

「涼宮。宗像と風間と共に脱出しろ」

『!!--』

涼宮と呼ばれた部下は息を飲む。

他の二人も同様だ。

涼宮は号泣しながら反対する。

しかし、彼女達の網膜ディスプレイは信じられないものを映し出す。

『ヴァルキリー1の自爆装置作動中』

涼宮は泣きながらも遠隔操作にてそれを止めようとする。  
それもそのはず。

彼女は『彼』を憎からず想っていたのだから。

『彼』に緊急脱出を進める。  
ベイルアウト

だが『彼』は動こうとしない。

不意に『彼』は呟いた。

「死力を尽くして任務にあたれ。

生ある限り最善を尽くせ。

決して犬死にするな」

過去に最高の先達から教えられた言葉。

その言葉の意味を知っている三人は動きを止める。

『彼』は再び微笑み敬礼をする。

彼女らは泣きながら返礼をした。

もう交わす言葉はない。

涼宮は去り際に『彼』に呟いた。

『今までご苦労様でした。  
それと……愛していたよ、白銀』

それを聞いて三度微笑んだ。

彼女達が十分距離をとった事を確認して『SDS』と書かれたボタ  
ンに拳を乗せる。

周りにはもう敵だらけだ。

あと数分もしないうちにコックピットに殺到するだろう。

もちろん、そんな事はさせない。『彼』は目を瞑り拳を振り上げる。

「クソ野郎共。

人類を無礼<sup>なめ</sup>るな　　！！」

極東国連軍大佐『白銀武』

火星オリジナルハイヴ、通称『マーズ・ゼロ』攻略中に戦死。

しかし、武が自爆した事により、マーズ・ゼロの反応炉は破壊され  
た。

武の死から数日後。

国連軍は地球圏奪還を宣言したのだった。

## 第一話（前書き）

今回は台詞少なめです。

## 第一話

「ん……ここは……？」

とある部屋で一人の男性が目を覚ます。

彼……『白銀武』が寝ていた場所は、とても懐かしい場所だった。ベッドがあり、勉強机があり、ラジカセがあり……と、彼にとつては十年以上前の景色だ。

俺の部屋か？

そう。今いる部屋は武がまだ学生だった頃に使っていた部屋だった。2001年の10月22日に、普通の世界で普通の学生をして、普通の生活をしていた武に転機が訪れた。

朝起きたら、見慣れた神奈川県横浜市柘町が廃墟になっていたのだ。混乱するも、取りあえず学校へと向かったが、そこには仰々しいゲートと、馬鹿みたいに大きなレーダーがある施設が建っていたのだ。つた。

門を見るとあるべき学校名……『白陵大学付属柘学園』ではなく以下の名前があった。

『国連太平洋方面第11軍横浜基地』

ここまできて武は思った。

『これは夢だ』と。

だが、夢ではなかった。

横浜基地にいた顔馴染みの女性『香月夕呼』から信じられない事実を告げられる。

「この世界はアンタのいた世界じゃないのよ」

夕呼曰く、この世界は異星人に侵略されている……と。  
異星人の名は

『 Begins of the Extra Terrestrial  
all origins which is Adversary o  
f human race 』

日本語に直すと、

『 人類に敵対的な地球外起源種 』

通称 『 BETA<sup>ベータ</sup> 』だ。

1967年1月25日に人類に初接触したと『 思われる 』  
初接触者の名前は不明。

何故ならば、ファーストコンタクトした人々は全員消息不明だから  
だ。

彼らは国際恒久月面基地『 プラトニー 』からサクロボスコクレータ  
ーに展開していた複数の地質調査チームだった。

その全員が突如消息を絶ち、第一次捜索隊も同様の運命を辿った。  
そして、その二日後の1月27日、ある通信が入る。

『 プラトニー、我々は大型生物の襲撃を受けている、繰り返す、  
生命体が我々を攻撃している！  
映像を送る、急ぎ衛星も回して 』

これは、サクロボスコ第二次捜索隊V・グリソム隊長からのBETA  
A遭遇の人類初の通信だった。

この言葉が、世に言う『 BETA大戦 』の幕開けだったのである。  
それからと言うもの人類は劣勢を強いられた。

『 月は地獄だ 』

これは1969年、国連宇宙総軍司令官J・キャンベル大將が残した言葉だ。

月面で大繁殖したと思われるBETAと、全てを地球から持ち込まなくてはならない人類とでは、兵站能力に差があった。

人類もただBETAの侵攻を黙って見ていたわけではない。

例えば、地球軌道マストライバーによる長距離投射爆撃を試みた。しかし、殲滅には至らなかった。

そして、1970年、機械化歩兵装甲が投入された。だが、それらもBETAの侵攻を止める事は出来なかった。

1973年ついにBETAが地球侵攻を開始した。

同年4月19日に中華人民共和国新疆ウイグル自治区喀什に降下ユニットが到着。

これが後の『オリジナルハイヴ（日本名呼称名：甲一号）』である。ここで人類はBETAの圧倒的な物量を目にする。

が、これまでの兵器、戦術が投入可能な事から、当時の人類は地球上でのBETA殲滅に自信を持っていた。

実際、BETA研究の独占を図った中国政府はBETA到着を国内問題として国連軍の介入を拒否し、『人類共有財産の独占』と各国の非難を浴びたが、当時の国際社会自体にそれを容認する空気があった事は否めない。それが間違いだと思わずに。

1974年、ある兵器が登場する。

人類の新たな鎧と呼ばれたそれは、

『戦術歩行戦闘機』 通称『戦術機』だ。

これまでのようには航空兵力が投入できれば良かったが、それは不可能となった。

なぜならば、新種BETA『光線級』<sup>レーザー</sup>が登場したからである。

この光線級は、航空機やミサイルはおろか砲弾ですら空中撃破してしまう。

高度500mで低空侵入してくる飛翔体を100km手前で寸分違

わず撃墜するという驚異の新種である。

その後、この光線級により、中国・ソビエト連合軍、そして人類の敗走が始まった。

これを受けて、米国マクダエル社が『NCAF-X計画』にて『NCAF-X1』を概念実証実験機として開発した。

この機体は人類初の戦術機『F-4』 通称『ファントム』へと受け継がれた。

F-4登場以来、戦術機は主力兵器の座を不動のものとして、世界各国に配備され、それは日本帝国も同様だった。

しかし、1998年、オリジナルハイヴから東進してきたBETAが日本帝国本土へと到達。

当時の日本帝国は米国の属領と罵られながらも高い生産性、軍事力を誇り、発展を遂げてきた。

だが、BETAの物量は如何ともしがたく、上陸開始から一週間で九州・中国・四国地方が陥落し、総人口の三割にあたる3600万人を失った。

それでも、帝国軍は日米安保条約に基づき出動した米軍と共に帝都・京都の防衛に全力を尽くし、一ヶ月に及ぶ死闘を繰り広げた。

しかし、BETAの物量に日本帝国政府は遂に帝都の完全放棄を決定。首都機能を経済的中心地だった東京へと移転させ、最後には帝国軍自らの手で京都市街地域に砲爆撃を行い、中部防衛戦への撤退の時間を稼ぐ事になる。

ここに千年の都は灰塵と化し、以後1年に及ぶBETA支配下で完全なる荒野へと変えられてしまった。

帝都が陥落したことにより、佐渡島にハイヴ建設を許してしまう。帝国軍は関東・東海地方に絶対防衛線を敷いて絶望的な戦いを続けたが、その最中に米国は同盟国間の指揮権問題 日本帝国が米国の命令に従わないというこじつけ を理由に日米安保条約を一方的に破棄し在日米軍を米国本土へと即時撤退させた。

これに対応しきれなかった帝国軍は1998年10月には西関東ま

でが陥落。

新帝都・東京直前での謎のBETA転進によって一定の時間を稼げたが、佐渡島に続き横浜にまでハイヴを建造されてしまう。

異例の早さで成長を遂げた横浜ハイヴを前に人類は為す術もなく、以来帝国軍は多摩川を挟んでの決死の防衛戦を続けることになる。人類の明日は、日を追うごとに絶望へと塗り潰されていった。

1999年に於いて、世界人口は1973年比で50%以下、20億人程度にまで激減している。

1999年8月、その絶望的な世界に於いて、ひとつの反攻への狼煙が上がった。

### 『明星作戦』

横浜ハイヴの攻略と本州島奪還を企画した大規模作戦は、いくつかの点に於いてBETA大戦史上特筆すべきものとなった。

何より、明星作戦は結果的に、人類が初めてハイヴ攻略に成功した作戦となった。

だが本作戦を顧みる時、勝利には前述のような『結果的』という言葉葉が付与される。

同年8月5日に発動した横浜ハイヴ攻略戦は、結局過去のハイヴ攻略戦と同様の事前想定を遥かに上回るBETAの物量に加え、各国間の連携不足が追い討ちを掛ける形で大苦戦に陥った。

僅かな可能性に賭けて地表の部隊を突入させるか、再起を期して撤退するか 作戦の継続を巡って司令部が揺れる中、突如米国政府より『G弾攻撃及び予測効果範囲からの撤退要請』が通告された。

### 『G弾』

それは五次元効果爆弾とも呼ばれ、BETA技術由来兵器である。

そのG弾は被爆地域に半永久的な重力異常を引き起し、人間や生態

系への影響も未解明である諸刃の剣であったのだ。

日本政府はこの一方的な命令に等しい通告に激怒し、攻撃の中止を要求するも米国はこれを無視。

8月6日早朝に最後通告を行った後、軌道上に待機した装甲駆逐艦から2発のG弾を投下した。

1999年8月6日午前8時15分、横浜ハイヴ上空で連続起爆された2発のG弾の威力は凄まじく、地表構造物と地下茎構造モニメントの一部を削り取り、地表に出現しつつあったBETAもそのほとんどを、展開していた帝国軍ごと殲滅。

さらに地下茎構造深部に存在していたBETAの多くが謎の機能停止にいたり、地表に撤退した部隊が再度地下茎構造に突入することで反応炉を始めとするBETA施設の制圧に成功し、BETAに囚われていた一人の日本人少女の救出に成功した。

しかし、明星作戦で得たものは勝利ばかりではない。

『G弾がもたらした最大の被害は、人類の結束を二分したことである』

この言葉は、国連総会に於いて日本帝国首相榊是親の演説の中の一言葉である。

その言葉通り、日本帝国内での反米感情は爆発寸前であった。

1998年10月に於ける日米安保条約の一方的破棄に続いて、今回は国内でG弾を使用したのだ。

国民の怒りは当然である。

そうした、明日への確固たる展望を得られぬまま、人類は21世紀を、そして2001年10月22日を迎えるのである。

とまあ、説明くさい文章はこれくらいにしておこう。

武はベッドから起き上がり、もう一度部屋を見回す。

確かに自分の部屋だ。  
自分が元々いた世界なのに何だか落ち着かない。  
取りあえず、着替えよう裸になる。  
が、一つの事に気がついた。

「この体は…どういう事なんだ……？」

そう。武の体は、軍人として訓練されたものだったのだ。  
逞しい上腕二頭筋。  
鋼のような大胸筋。  
六つに割れた腹筋。  
訳がわからない。

「ハックション！」

暦の上では十月。

そんな中、裸でいたらくしゃみもする。

白陵柊の制服を着ようと手を伸ばしたら……

「な……っ！」

そこにあっただのは、白い白陵柊の制服ではなく、BETAがいる世界で使用していた黒いC型軍装であった。

「まさか……！」

慌てて窓の外を見る。  
そこにあっただのは……

廃墟だった

。

一面の……



第二話（前書き）

ゆ、夕呼がかなり丸い

2010/12/6 誤字修正及び高原追加

## 第二話

その後、取りあえず国連軍の軍服に着替え、家を出る。周りはやはり廃墟だ。

「戻ってきたのか……」

武がこの世界を体験するのは、これで三回目だ。

一度目は、ガキだったためにオルタネイティヴ？を発動させてしまい、その後の記憶はない。

二度目は、オルタネイティヴ？を成功させたものの、覚悟が足りなかったために仲間を殺してしまった。

「理由はわからないけど、神様がくれたラストチャンスってところかな」

そう思い、歩きだす。

そこでまた気づいた。

体が軽いのだ。

一つ前の世界では、年齢も40近かったので、衰えを感じ始めていた。

しかし、その衰えを感じない。

近くの碎けた硝子の破片で顔を確認する。そこには白髪もなく、皺もない20歳前後の武がいた。

「この体と、この記憶があれば皆を救えるかもな」

そうして横浜基地に向かおうとしたが、あるモノに目が止まる。

それは、隣家『鑑家』の横に跪く白銀はくぎんの戦術機だった。

「『狼牙』……」

その戦術機は、第5世代戦術機・狼牙であった。  
いそいで乗り込みシステムチェックする。  
使用に問題はないようだ。

どうする？こいつを連れて基地まで行くか？

武はそう考えたが、結局置いて行く事にした。  
回収は後でもいい。

これに乗って行って、敵として拘束されたら目もあてられない。  
そのまま基地に向かうのだった。

「いつ見ても殺風景だな」

ここ、横浜基地正面ゲートでは、二人の衛兵が気だるげに任務を遂行していた。

黒人と東洋人の二人。

黒人のその言葉に東洋人が口を開く。

「そうだな…… ハイヴを攻略しても、肝心の土地がこれじゃあ……」

「まったく、G弾ってのは恐ろしいぜ。」

「……ん？誰か来るぞ」

黒人が目にしたのは、ゲート前の坂を登ってくる人影だ。

武である。

「申し訳ありません。こちらを通るには許可証と認識番号を……」

任務を続行しようとした東洋人は固まる。

目の前にいるのは20歳前後の青年……少年と言ってもいいくらいだ。

階級も精々少尉か中尉であろうと思った。

しかし、その軍装についているのは大佐の徽章。

こんな若いのに……と思っていると、武が口を開いた。

「済まないが、許可証も認識番号もない。」

私はこの基地の所属ではないのでね」

衛兵二人は困惑する。

「どづいつ事……てしょうか？」

「私は香月博士に呼ばれて来た。」

確か、自分に関する事は全て報告するようにと言われているはずだが？」

これは武の賭けだった。

前の世界では、夕呼は同じ命令を下していたからだ。

「仰る通りです。」

失礼ですが、お名前を伺っても……?」

そして、その賭けに武は勝った。

やはり同様の命令が下されていたようだ。

「白銀武だ」

名を告げた途端、二人の顔色が変わる。

しかし、その表情は敵対のそれではなく、驚愕の中に友好の色が見てとれた。

「伍長……?」

武が声をかけると、二人はハツとしたように動き出す。

「し、失礼しました。」

香月博士からは、『白銀武という衛士が来たら最優先で執務室に通すように』との命令を受けています」

「何……?」

どういふことだろうか。

一度目でも二度目でも、この様なことはなかった。

「それともうひとつ。『白銀はたった一人で戦線を押し上げるような優秀な衛士だ』と伺っております……その、何と申し上げたらいいか……」

「ガキが本当に優秀なのか……つてところかな、伍長？」

「い、いいえ！そんな事は！」

とにかく、迎えを呼びますので、少々お待ち下さい」

そう言うと、東洋人伍長はゲート横の詰め所に向かった。

五分ほどして、正面入口から、綺麗な金髪をショートカットにした美女がやってきた。

「白銀武大佐ですね？」

私はイリーナ・ピアティフ中尉です。

こちらへ、香月副司令がお待ちです」

そう言うと、ピアティフは先導して歩き出すのだった。

地下19階、副司令執務室。

ピアティフがノックすると直ぐに返事があった。

「入りなさい」

「失礼します。副司令、白銀大佐をお連れしました」

「ありがと。じゃ、アンタはさがりなさい」

言われたピアティフが出ていくと、夕呼と武の二人だけになった。これまでに不可解な出来事が頻発していたので、多少混乱している武。

それを見て、夕呼は悪戯な笑みを浮かべる。

「白銀、アンタは明日付けでA・01部隊着任と第207訓練小隊の戦術機特別教官をやってもらうから」

夕呼のそのいきなりな言葉で武は我に帰る。

「ちょ、ちょっと待って下さい！

夕呼先生、いったいどういう……」

「久しぶりね白銀。

アンタ、まだ大佐だったのね。

それから、『先生』って呼ばれるのも久しぶりだわ」

その言葉で武はあることを考える。

即ち

「先生も前の記憶があるんですか？」

「ピンポーン」

これで合点がいった。

正面ゲートでのやり取り。

夕呼の態度。

前の世界での記憶を夕呼も引き継いでいたのだ。

「で、アンタは私が死んで何年後に死んだの？」

「五年後ですね。」

「マーズ・ゼロの中で自爆しました」

「ふうん、じゃあマーズ・ゼロは攻略出来たわけか」

「ええ、恐らく」

武は思った。

何故かは知らないが、夕呼にも因果の流出がおきているのだからと。

「ちなみに私だけが前の記憶を持つてる訳じゃないわ。  
もう一人いるのよ」

「もう一人……ですか？」

「ええ。アンタも知ってる娘よ。」

……入ってきなさい」

夕呼が通信機に言うと、背後の扉が開いた。

そこにいたのは、銀髪でウサギのような髪留めをした少女だった。

「霞……」

そう、社霞だ。

オルタネイティヴ？で産み出された、人工ESP発現体だ。

「白銀さん、お久しぶりです」

霞は夕呼が死んで二年後に死んだ。

この二人の死は武に衝撃をもたらしたのだった。

何故ならば、二人は『殺された』からだ。

夕呼を殺したのは、旧オルタネイティヴ？推進派。

国連総会に出席した夕呼を拳銃で撃ち殺したのである。

その夕呼の死後、米国が半ば無理矢理に霞を接収。

米国の『命令』に悠陽殿下は最後まで拒否をしていた。当時

いつでも未来の話であるが、悠陽殿下にとって、武を通して知り合

った霞は数少ない友人だったのだ。

霞にとっても大切な友人であったため、霞は進んで米国へと向かっ

た。

しかし、そこは地獄であったのだ。

人工ESPという事で単身ハイヴに突入させられ、生還したらした

で研究という名の拷問 中には性的なものも含まれていた を

され、衰弱しきっていた。

それを知った日本帝国政威大將軍煌武院悠陽と英雄白銀武国連軍少

佐は同時に米国への非難声明を発表。

人類の聖母香月夕呼博士を殺害したのが米国人だったため、米国は

国際社会での発言力を無くしていったのである。

その後、武の元へと返された霞はもう手の施しようがなかった。

武の腕に抱かれ、微かな笑みを浮かべ眠るように旅立っていったの

だった。

その事を思い出し、涙ぐむ武。

その武の手を握る霞。

「大丈夫です。私は生きています」

「ああ……そうだな」

二人の世界を創る武と霞であつたが、ここにいるのは二人だけではない。

「アンタ達さあ、私の事を忘れてない？」

その声に振り向くと、悪戯な笑みを浮かべた東洋の魔女がいた。

「まったく……恋愛原子核も絶好調のようね」

「い、いや……ハハハ」

呆れる夕呼に、乾いた笑いを溢す武。

霞は仄かに頬を紅く染めていた。

と、急に夕呼は真面目な顔になる。

「さつきも言った通り、アンタにはA-01部隊に入ってもらつた上で、207訓練小隊の特別教官をしてもらつから。」

これ、名簿ね」

名簿を受け取つた武はざつと目を通す。

『A-01 特殊任務部隊』

伊隅みちる大尉

涼宮遙中尉

速瀬水月中尉

宗像美冴中尉

風間禱子少尉

麻倉翔子少尉

柏木晴子少尉  
涼宮茜少尉  
高原美穂少尉  
築地多恵少尉  
七瀬凜少尉

となっていた。

二名ほど知らない名前があったが、前の世界では武がA-01に着任する前に戦死したのだろうと予想をつけた。

そして、207小隊の名簿に目を移す。『第207衛士訓練小隊B分隊』

榊千鶴訓練兵  
御剣冥夜訓練兵  
彩峰慧訓練兵  
珠瀬壬姫訓練兵  
鎧衣美琴訓練兵

そして……

「なっ……!!」

武は目を疑った。

最後にあつた名前は……

『鑑純夏特別訓練兵』

生きていてくれたのか

そう思う武。

固まった武に夕呼は告げる。

「ああ、言っただけじゃなかったわね。  
鑑は明星作戦の時に救助のよ」

「じゃあ、もう00ユニットになってるんですか？」

武の疑問は最もだろう。

前の世界なら兎も角、今の夕呼は前の世界の記憶があるのだ。  
簡単に00ユニットを造ってしまうだろうから。

しかし、夕呼は違うと言う。

「私が『こちら』に来たのは五年前でね。当時の部下にある命令を  
していたの」

「命令……ですか」

「そう。『白銀武と鑑純夏の最優先保護』って命令をね」

「なら、純夏は……」

「ええ。ちゃんとした人間よ」

良かった

武は嬉しさのあまり叫びだしそうだった。

前の世界のように悲惨な運命を辿らなくて、人間として生きている  
純夏。

早く逢いたかったが、疑問が残る。

「先生、この世界の『俺』はどうしたんですか？」

そう言うと、夕呼は神妙な顔をする。

「残念だけど、この世界のアンタは死んでるわ」

夕呼曰く、明星作戦の折り、国連兵が武と純夏を救助しようとしたが、何らかの衝撃で気絶した純夏を守るため、国連兵の静止を振り切って単身素手で兵士級ソルジャーに挑んだところ殺害されたらしい。

幸いな事に、純夏には武が死亡する場面を見られていないが、保護された後半狂乱だったらしい。

「じゃあ、また俺の戸籍は無いつてわけですね」

月詠中尉にまた因縁をつけられる……と気が滅入る武であったが、夕呼はそれを否定する。

「この世界のアンタが死んだ後、私がオルタネイティブ権限において戸籍抹消をとめたわ。

つまり、データ上はアンタは生きてるの」

夕呼が言うには、武が『死んだ』後にデータ上生きている武を国連軍に入隊させる。

そして、頃合いを見計らって前と同じ大佐に昇進させたのだ。

「このほうが、アンタもやりやすいでしょ？」

有難い。有難いが腑に落ちない。

「なんでここまでしてくれるんです？」

武の言葉に対する夕呼の返答は簡潔だった。

「人類の救世主にささやかなご褒美よ」

そう言うと、夕呼微笑む。

それは前の世界に於いての夕呼の別名『人類の聖母』を表すかのような慈愛溢れる笑みだった。

その後、今日は207小隊との顔合わせ、明日はA-01への着任の後に次世代OS『XM3』の開発などを決めて夕呼の執務室を出た。

エレベーターホールに行くと、懐かしい顔が待っていた。

「出迎えご苦労、軍曹」

「ハッ！恐縮であります、大佐殿！」

そこに居たのは『神宮司まりも』軍曹だった。

前の世界で自分の不甲斐なさが原因で『殺して』しまった恩師だ。

「では、第207衛士訓練小隊の元へのご案内いたします」

まりもはそう言うと、先導して歩き出す。向かった先はPX（食堂兼売店）だった。なるほど、時間はもう夜に近い。訓練も終わっているのだろう。

PXに入ると、これまた懐かしい面々が雑談をしている。分隊長である千鶴がまりもに気づき号令をかける。

「敬礼！」

起立し、敬礼をする訓練兵たちに綺麗な返礼をするまりも。

「休んでいるところ悪いが、貴様らに新しい教官を紹介する。では、大佐」

頷き前に出ると、武の目が潤む。

それを気づかれないように、自己紹介をする。

「貴様らの戦術機特別教官を任された、白銀武だ。階級は大佐。よろしく頼む」

見回すと、美琴以外の顔がある。

美琴は訓練中の怪我で検査入院中だ。

その207小隊は驚愕に染まっている。自分たちの新しい教官が大佐という事に加え、こんなにも若い事に驚いている。が、たった一人だけ違う反応をする人物がいた。

「武……ちゃん……？」

鑑純夏である。

「鑑！貴様あく！」

上官に対する態度ではないため、叱責しようとするまりもを武は手を上げて止める。

「久しぶりだな、純夏」

言うと、純夏は泣きながら武に抱きついてきた。

「うわああああん！」

本当に……本当に武ちゃんなんだよね！？」

「ああ、そうだ」

その光景にさしものまりもも固まる。

武は苦笑いし、まりもと207小隊に告げる。

「俺と純夏……鑑訓練兵は幼なじみでな。」

明星作戦の時に離ればなれになっていたんだ」

それを聞くと、憐れむような、それでいて嬉しそうな、ほっとしたような表情を浮かべる面々。

そして、千鶴が自己紹介をしようとするが……

「ああ、貴様らの事は書類で見た。」

自己紹介は不要だ」

そう言うと、純夏が泣き止んだ頃合いを見計らって、武は締め言葉の口にする。

「俺が指導するのは戦術機での訓練からだが、貴様らは総合評価演習を突破できるものと信ずる！」  
貴様らの能力に期待する！」

「「「「「ありがとうございます！」「」「」「」

こうして、白銀武の三度目の人生が始まったのだった

### 第三話（前書き）

戦術機の設定などは苦手です

矛盾や質問などは感想までお願いします。

2010/12/6 誤字修正

2010/12/11 矛盾点修正

2010/12/11 誤字修正

## 第三話

### Other View

本来ならば、今日は戦術機演習のはずだった。

しかし、今朝副司令から新しい隊員が着任したと言われ……

「大尉、結局何なんですか、この呼び出しは？」

副隊長である速瀬水月以下、A-01部隊隊員を全て引き連れてブリーフィングルームへと向かっていた。

ああ、紹介がおくれたな。

私の名前は伊隅みちる。見ての通り大尉だ。

そして、横浜基地副司令香月夕呼博士の直轄部隊『A-01特殊任務部隊』の隊長でもある。

「速瀬、さつきも言わなかったか？」

新人が一人、入隊するんだ」

「えっ？そうなんですか？」

その返答を聞いて呆れる。

こいつ……聞いてなかったのか？

すると、横から速瀬の親友である涼宮遙が声をかけてきた。

「もう、ダメだよ水月？」

ちゃんと聞いてなきや」

おっとりとしながらもハッキリ注意する。

正直、涼宮の存在は助かる。

「速瀬中尉は新人に興味は無いんですか？」

速瀬に語りかけるのは、涼宮遙の妹涼宮茜だ。

「んなわきゃないでしょうが！」

大尉、新人との演習はやるんですか？」

目を爛々と輝かせる。

まったく、いつもいつもこればかりだな。

「速瀬中尉はやはり戦いに性的快感を……」

「む〜な〜か〜た〜？」

「って、築地が言ってました」

「ふえ？わ、わだす！？」

速瀬をからかったのは宗像美冴。

中性的な雰囲気を出す美女だ。

かく言う私も……ゲフツ！ゲフン！

ま、まあ気にしないでくれ。

そして、宗像に罪を擦り付けられたのは、築地多恵。いつも涼宮（妹）と一緒にいる。

慌てるどころかしらの方言をまくし立てる。

「築地〜いい度胸ね〜」

「ひいいやああ！」

わだす、んな事言つてねっぺさあ〜！」

ほらな。

「ふふっ。美冴さん、いけませんよ？」

宗像を止めるのは風間禱子。

いつも柔らかな微笑みを絶やさない日本美人だ。

「そうです。築地少尉を虐めなください。ねえ、柏木少尉」

「アハハ、まあ別にいいんじゃない？」

風間と同じく宗像を注意するのは七瀬凜。

それを笑って流すのは柏木晴子だ。

七瀬は隊の風紀には私よりも厳しい。

こんな軍トコロでなければ風紀委員にでもなっていただろう。

対して柏木は性格が軽い。

が、戦闘での割り切りのよさと、視野の広さは目を見張るものがある。

「もう、麻倉少尉も何か言つて下さい」

「……………何を？」

七瀬が声をかけたのは、麻倉翔子だ。

こいつは……………何と言うか、無口なやつだ。

しかし、新任の中でも戦術機の操縦はトップクラスだ。

「まあまあ、凜ちゃん。いいじゃないですか、いつもの事ですし」

ほんわかおつとりと言っているのは高原美穂。

涼宮（妹）に次いで指揮官特性が高い奴でもある。

それはさておき、ブリーフィングルームに着いたんだが、いつまで騒ぐ気だ、こいつら……

騒ぎ出した部下をまとめるため一つ手を叩く。

「いい加減にしろ貴様ら。

ブリーフィングルームにはもう着いたんだぞ」

そう言つて部屋に入ると副指令はまだいらつしゃつてなかった。

一人、技術士官だろうか？ツナギを着た20歳くらいの青年がいた。その士官は我々を見ると懐かしそうな顔をした。

まあ、気にしないでおこつ。

副司令はまだか……

Other View End

夕呼がブリーフィングルームに入ると全員そろっていた。

「敬礼！」

みちるが号令をかけると全員が綺麗な敬礼をする。

それを見た夕呼は、不快そうな顔だ。

「もう、止めてよ伊隅」

「は、失礼しました」

夕呼はこういう軍人然としたものを嫌う傾向にある。  
本来、研究者だからだろうか？

「副司令、新人は来てないんですか？」

水月が言つと、夕呼は不思議そうな顔をする。

「？ 何言つてんの？  
そこにいるじゃない」

指差した先にはツナギを着た武がいた。

「っていつか白銀。」

何でツナギなんか着てんのよ？」

「C型軍装は洗濯に持って行かれましてね。

スペアが無いんでこれを着てるんです」

武は服を一着しか持っていなかった。

それはそうだろう。

こちらに来てから服を買いに行つて無いし、支給もされてい  
ない。

仕方なく、割り振られた士官室備え付けのツナギを着てきたのだ  
つた。

「ま、いいわ。こっちに来て自己紹介しなさい」

「はいはい……」

A-01の前に立つ。  
そして、敬礼をした。

「本日付けでA・01部隊に着任した白銀武だ。  
よろしく頼む」

そう言うと、A・01の面々は不快そうな顔をする。  
それはそうだろう。

自分より年下らしき、しかも階級も下のように見える人間から威圧的に自己紹介されたのだから。  
案の定、好戦的な茜が怒り出した。

「何？あんた上官に対する態度も知らないわけ？」

この言葉には武も驚いた。

夕呼を見ると、肩を震わせている。  
笑っているようだ。

「ちょっと！聞いてるの!？」

「あゝ涼宮、ちょっと黙れ」

「な……!!」

反応しない武に更に怒った茜を一刀両断で黙らせる。  
これにはみちると水月も注意しようとおもったが、武が夕呼に話しかけたために中断した。

「先生、俺の事言っていないんですか？」

「……っ!!……っ!!……はあゝやっとおさまった。

ああ、ごめんねゝ階級の事を言うの忘れてたわ」

「絶対わざとだ……」

恨みがましく見る武を無視し、夕呼は一步前が出る。

「あのさあ、アンタ達。徽章が無ければ相手の階級もわからない訳？」

誰のせいだ、誰のっ！！

そう思う武であるが、口には出さない。

夕呼の悪戯に反発すると、十倍二十倍になって帰ってくるのを知っているからだ。

「どごういう事ですか？」

代表してみちるが問いかける。

だが、夕呼はそれに答えず武のほうを向いた。

「白銀、もう一回ね。今度は階級もちゃんと言いなさい」

「はあ……了解」

再度敬礼をして自己紹介をやり直す。

「本日付けでA-01部隊に着任した白銀武『大佐』だ。よろしく頼む！」

固まるみちる達。

それはそうだろう。

今まで士官だと思っていた人物が実はこの場で夕呼に次いで二番目に偉いのだから。

そして、時は動き出す。

「「「「「ええ〜！た、大佐〜！？」「」「」「」

「うわっ！」

その悲鳴とも言える叫びに、武は驚く。

中でも、水月と茜はムンクの「叫び」のような顔をしている。

「ぶ、部下が失礼しました、白銀大佐」

いち早く我に帰ったみちるが、先ほどの茜の態度を謝罪する。

「ハハツ…まあ、言いたい事はわからんでもないよ。

俺は茜や晴子と同年だからな」

「あ、茜っ！？」

「晴子かあ〜（いいかも）」

「ん？茜には姉がいるだろう？  
混同しないように呼んだんだが……」

武が新任と同じ年という事に驚愕する。

同時に、茜と晴子を呼び捨てにした事に驚きが走る。

晴子はまんざらでもない様子だが、茜は親の仇を見るように睨んでくる。

とにもかくにも、これからは親睦を深める意味でも部隊の全員を名前で、しかも呼び捨てで呼ぶことに決まった。

茜には伊隅が上官命令という事で納得させた。

もちろん先任も同様だ。

まあ、現実には於いても社会に出れば年下から命令されることも珍しくはない。

他愛ない話をしていると、夕呼の部下らしき技術者が入ってきて耳打ちをする。

彼女の言葉を聞いて、夕呼は苦虫を噛み潰した様な顔をした。

「アンタ達、顔合わせは終了よ。

サッサと訓練に戻りなさい。

白銀は残るようにね」

夕呼が言うと、武を残し全員が部屋を出ていく。

「白銀、アンタねえ」

呆れた様に言う夕呼。

対し、武は何故そんな言葉を向けられるかわからない。

「戦術機……」

「…あゝ」

そのボソリと言った言葉を聞いて武は合点がいった。

「一緒に来た戦術機『狼牙』の事をすっかり忘れていたのだ。」

「はあゝアンタの家近くで発見されて回収されたわ。」

「一応、第90番格納庫に収容したから来なさい」

「りよ、了解……」

そう言うと、二人は格納庫へと向かったのだった。

## 第90番格納庫

そこは特別な機体や、目に触れさせる事が出来ないものを収容する特別格納庫だ。

その存在を知らない者もいるため、怪談話も存在するが、長いのでここでは割愛する。

武と夕呼の前には白銀の戦術機が威風堂々と佇んでいた。

「これって『飛燕』？」

夕呼は見たことがある戦術機だったため、その名を当てようとする。しかし、答えは外れだった。

「いえ、『狼牙』です」

第4世代戦術機『飛燕』

第5世代戦術機『狼牙』

見た感じは殆ど変わらないのだ。

『07式戦術歩行戦闘機 飛燕』

これは武夕呼、そして帝国技術廠が共同で開発した機体である。

国連軍に対する日本国民の悪感情 といっても横浜基地のみに対してだったが 改善の末に産み出された純帝国産機体だ。見た感じは『不知火』と『武御雷』を足して二で割ったようなスマートな外見をしている。

しかし、出力は武御雷の二倍以上も違うのだ。

それを可能にしたのが『人工筋肉<sup>マッスルパッケージ</sup>』である。

基本フレームを人工筋肉にしたお陰で、これまでよりしなやかな、且つ生物的な動きを再現出来るようになった。これは『この世界』の生物工学が進んでいるため人間の筋肉を再現できた事に起因する。人工筋肉のためこれまでの出力の二分の一以下で戦闘行動が可能であり、従来の戦術機と同程度の出力で戦闘行動を行うと、相対的に機体性能も上がるというわけだ。

そして、人間の筋肉を再現しているためリミッターを取り付ける事となった。

何故ならば、限界を越えて戦闘行動を行うと、人工筋肉の繊維が破壊され修復不可能となるからだ。さらに言えば、リミッター解除し

た場合、中にいる衛士もただではすまない。

100Gを越える負荷がかかるため、30秒もたずに弾け飛んでしまう。

帝国側はリミッター解除時のデータを取りたかつたらしいが、流石にそんな非人道的な実験は武が許さなかった。

なので、リミッター解除時のデータはあくまでシミュレーション上のデータである。

さらに後頭部にはセンサーが付けられた。ヴァルネラフルコーン後方危険円錐域にBETAが近づいた際、警告を発するものだ。

このため、死角が無くなった様に感じるが、人工筋肉を採用しているため、装甲を若干薄くせざるを得ない面もあり、搭乗者を選ぶ機体でもあった。

大きな利点を挙げるとすれば、燃料切れで戦闘続行不可能な状態でも、機体を動かす事は可能という点だ。

筋肉間で発生する生体電流を利用し、エネルギーを発生させ、機体を動かすのだ。

しかし、生体電流エネルギーは微量のため、戦闘行動は不可能であり、専ら戦域離脱が目的となる。

これのお陰で、戦死者が飛躍的に減ったのだ。

さらに飛燕には別のカスタム機が一機だけ存在し、その機体名も変わる。

『07式戦術歩行特別機 あかつき 曉』

そういう名で呼ばれるそれは機体カラーは深紫に黄丹のラインが入ったもの。即ち、將軍専用機である。ちなみに深紫と黄丹は、現実に於いて天皇以外の一般人は使用が不可能の禁色である。

これは政治体系が違うマブラヴの世界於いてどのように解釈されるかは不明である。

……話を戻そう。

とにかく、飛燕の性能の良さ、生産コストの低さ、人工筋肉のためスピアをいくらかでも造れる事に加え、生存率の高さが城内省の目に止まり暁が生産される事となった。

そして、香月夕呼博士の死後、地球上のハイヴを駆逐した人類にとつての戦闘の舞台は地上ではなくなった。

そう、月と火星である。

その時代、火星のマーズ・ゼロの他に月の『静かの海』にフェイズ8のハイヴ『ムーン・ゼロ』が建造されていた。

宇宙ではこれまでの戦闘行為が不可能になった。

それは当たり前である。

真空中では噴射降下もできないし、地面が無い或いは引力が低い<sup>フイストダウン</sup>ため噴射滑走は危険だ。さらに言えば噴射跳躍<sup>フイストジャンプ</sup>をしようものなら、空気の抵抗が無いためどこまででも飛んでいってしまう。そこで造られたのが

『11式宙間用戦術歩行戦闘機 狼牙』

である。

これは飛燕の兄弟機であり、基本フレームはそのままに装甲だけを変えた戦術機である。

科学者が宙域行動に於いてまず最初に着目したのは、真空中での姿勢制御だ。

結論から言えば、これは杞憂に終わった。

BETAは地面があるところでしか活動しないからだ。なので宙域での戦闘はおこらなかつた。

つぎに着目されたのは、低引力下での歩行及び走行である。

これは先の宙域戦闘での問題点 結論通り宙域戦闘は一回もおこらなかつたのではあるが よりも簡単に解決された。

足の裏に強力なスパイクを付けた……それだけである。だが、それ

も開発されるまで羽翼曲折を極めた。  
スパイクが強力すぎると足が抜けなくなる。かといって、スパイクの力が低すぎると簡単に抜けて、宇宙に放り出されるか、地面から浮いた瞬間に光線級の餌食だ。  
実に半年の歳月をかけて開発されたのが

『12式靴下部鉄鉞』

である。

さらに同時に体が浮いた、もしくは噴射跳躍をした時のためにスラストー付きのバックパック

『12式姿勢制御用背囊』

も開発された。

これにより宇宙戦闘 といっても月や火星といった大地がある場所に限られるが が可能となった。

最後に問題になったのは武器である。

これまでの突撃砲は意味を為さなくなった。

弾丸を発射したあとの軌跡などはあくまで1Gの重力下での事であるからだ。

無重力下では空気の抵抗が計算された弾丸ではホップアップしすぎたり、逆にダウンしすぎたりして真っ直ぐ飛ばないのである。

科学者達は頭を悩ませた。どうすれば真っ直ぐ飛ぶのかと。

そこで武は気づいた。

真っ直ぐ飛ばないのなら弾丸を誘導してやればいい……と。

この武の柔軟な発想には科学者たちも驚いたが、直ぐに開発が進められた。

技術的には問題ない。92式多目的自律誘導弾システムを流用すればよかったのだから。

こうしてこの誘導装置は87式突撃砲と87式支援突撃砲に取り付けられ

『12式誘導突撃砲』

『12式誘導支援突撃砲』

として生まれ変わったのである。

形としては、突撃砲は120mmマガジンをプルバック マガジンがトリガーより後ろにある形式 にし、もともと120mmマガジンがあつたところに誘導用レーザーを設置、支援突撃砲には高精度複合照準装置と一体化がなされた。

この誘導用レーザーにより狙ったBETAへと着弾するのだ。残るは長刀である。

飛燕には固定武装として日本刀が装備されていた。

これが使用不可になったのである。これには理由がある。

日本刀は西洋刀や東洋刀とは違い『切る』のではなく『斬る』剣だからだ。

自宅に和包丁と洋包丁がある方は試してみるといい。

洋包丁は『押して切る』のに対し、和包丁は『引いて斬る』のだ。

日本刀が緩やかな曲線を描いているのはこのためである。

そして、日本刀の最大の問題は『踏ん張り』である。

踏ん張らなければ綺麗に斬る事ができないのだ。

踏ん張りすぎるとスパイクが壊れるし、踏ん張らなければ斬る事ができない。

外国勢は長刀に小型のブースターを付け、柄にあるトリガーを引くことによつて上から叩き切る事を選んだ。

しかし、日本刀は前述の通り踏ん張つて引いて斬るのでこの方法は使えない。

そして四苦八苦の末に開発されたのが

『12式近接戦闘振動刀』

である。

これは柄にあるトリガーを引く事により、刀身を細かく振動させ、鋼鉄すら斬り裂く斬れ味を持たせた日本刀だ。これにより深く踏ん張らなくても敵を斬る事が出来る様になった。

その説明を受け、夕呼はため息を吐く。

「じゃあ、この狼牙は地上では使えないわけね？」

「いえ、装甲を変えれば使えますよ。」

基本フレームは飛燕と同じですし、ただ、飛燕の宙間戦闘用が狼牙  
つてだけですから」

前述の通り、飛燕と狼牙は装甲が違うだけの同一の機体なのだ。

「そう……ま、いいわ。伊隅たちへの顔合わせも終わったし、これ  
から忙しくなるわよ」

「ええ、わかってますよ」

これからの出来事を示唆するような二人の言葉は、広い格納庫内に  
消えていったのだった。

## 第四話（前書き）

2010/12/8 誤字修正  
2010/12/11 誤字修正

## 第四話

ユサ……ユサ……ユサ……

「ん？朝か？」

その日の朝、武は体を揺すられる感覚で目を覚ました。  
毎朝恒例のこれは前の世界から続くものだ。

「ふわああああ」

毎朝サンキューな、霞」

「いえ、好きでしてますから……」

傍らにいたのは霞である。

BETAがいない元の世界では純夏が、こちら側に来てからは霞が  
毎朝起こしてくれたので、目覚まし時計や起床ラッパで起きたのは  
数える程しかない。

そこに新たな闖入者が現れる。

「たっけるちゃん！オハヨ〜！！」

武の部屋の扉を騒々しく開いたのは純夏であった。

「純夏……もう少し静かにできないのか？」

苦言を呈する武であったが、純夏は聞いていない。  
その視線の先には霞がいた。

「あれ……？霞ちゃん？」

武は『おかしい』と思った。  
寝ぼけたせいで前の世界の感覚でいたが、この世界では純夏と霞はこの時点で知り合いらしい。  
それがおかしいのだ。

霞は夕呼の助手とも言えるべき存在。  
武と同じく『歩く重要機密』なのだ。  
対して純夏は一介の訓練兵。  
何故、面識があるのだろう。

「純夏、霞を知っているのか？」

「うん。だって私の訓練に付き合ってくれてるから」

武は思い出す。

純夏の『特別』訓練兵の意味を。  
207小隊の名簿を受け取ったあの日、純夏の『特別』の意味について夕呼を問い質したのだ。

『最初はアンタと鑑を逢わせてあげるために、強制的に国連軍に入隊させたわ。』

でもね、訓練をしていくうちに鑑の特殊な能力に気づいたの』

これはその時の夕呼の弁である。

その純夏的能力とは『予知能力』とも言えるべき勘の良さだ。  
詳しく聞くと、最初にそれが起こったのは冥夜との模擬刀を使った近接戦闘訓練だったらしい。

純夏はその頃基本的な訓練しか受けていない一般人。  
だが冥夜は、剣術だけに言えれば無限鬼道流の経験者のためほ

ば衛士と同等の能力を保持している。

つまり、一般人对剣術家。

これは誰が見ても勝敗は明らかだろう。

しかし、純夏は冥夜の刀の軌跡を全て避けたのだ。

これにはその場にいたまりもを含めた全員が驚いた。

まあ、結果的に体力が続かなかった純夏がギブアップしたのだ。

その後、まりもが純夏に質問したらしい。なぜ、刀を避けたのか

……と。

その答えがこれだ。

『うーん、自分でもよくわからないんですけど、刀がどこから来るかわかったんですよ。』

それに合わせて避けてただけです』

これを聞いた夕呼はCPの訓練を受けさせた。

すると、その勘の良さも手伝って、訓練兵でありながら歴代一位の記録を叩き出した。

それからである。

霞が協力し、純夏にCPの訓練を施すようになったのは。

回想している武に純夏が質問を繰り返す。

「なんで武ちゃんの部屋に霞ちゃんがいるのさ」

純夏は不満そうである。

これまでは自分が武を起こしていた。

それを仲間とはいえ、別の女の子に先を越されたのだ。

「すみません、純夏さん。香月博士が白銀さんと呼んでいたので…」

…」

「あ、そうなんだ」

霞の一言で納得する純夏。

「じゃあ、点呼に遅れないように私行くね」

「ああ、悪かったな」

「素直に謝るなんて、変な武ちゃん」

その後、制服に着替えた武を霞は副司令執務室へと連れて行った。純夏を抑える方便だと思っていたのだが、本当に呼ばれている武であった。

### 副司令執務室

「X M 3を今日中に完成させるわよ」

部屋に入った武を迎えた第一声がこれである。

「んな無茶な……」

それはそうだ。

前の世界ではX M 3を造るのにだいぶ時間がかかったのだから。しかし、夕呼は言う。

殆どの形は出来上がっている、と。

ならばさっさと量産させればいいのではないか？

そう質問した武に夕呼は呆れる。

「あのねえ、あれのデータにはアンタの三次元機動が不可欠なのよ？  
考えてみなさい。」

この世界ではアンタのデータがあるわけじゃない。

アンタ本人にデータを入力してもらうしかないのよ」

そう言われると合点がいった。

それからの時間は、データ入力とバグ取りをしたが、夕呼が粗方完成に近づけていたため、昼食を挟んで夕方には完成したのだった。

## Other View

先日と同じく副司令に呼ばれて私達はシミュレータールームに向かっていた。

恐らくこの前の白銀とかいう衛士関係だろう。

「どうしたの、茜？」

お姉ちゃんが話しかけてくる。

不満が顔に出ていたのだろうか？

「何か気に入くないのよ、あの白銀ってヤツ」

「上官に向かってその言い方はダメだよ」

お姉ちゃんはこう言うが、いきなり出てきて、『上官です』『はい、そうですか』とはいかない。

少なくとも私は。

伊隅大尉や速瀬中尉たち先任はこういう事がよくあるのか気にしていない様子だった。

私はまだ子どもという事だろうか。シミュレータールームに到着し、ある映像を見せられる。

今現在シミュレーターを使って訓練している映像だった。

それは凄いの一言だ。

何であんな動きができるのだろうか？

何であそこで跳べるのだろうか？

何であんな格好で攻撃を避けれるのだろうか？

それは熟練の衛士の動き。私も早くあんなになりたい。

そう思ったのだが、副司令から信じられない言葉を告げられた。

『あれを操縦しているのは白銀よ』

私は白銀を副司令のコネで大佐になったのだと思っていた。

同い年の大佐など聞いた事がないからだ。

しかし、コネなどで衛士としての技量が培われるはずもない。

認めよう。白銀は優秀な衛士だ。もう私の中には軽蔑の感情はなかった。

白銀……いや白銀大佐は速瀬中尉に続いて私の目標となったのだった。

Other View End

X M 3が完成してから夕呼はA - 01にこれを紹介すると言ってきた。

早くX M 3になれてほしいためらしい。

そういう理由から武が操縦する場面を見せつけたのだった。

夕呼が一つ気になったのは茜の目だ。

先日、白銀を着任させた時から侮蔑の感情が見え隠れした。

だが、武の映像を見続けているうちにその感情が消えていくのがわかった。

それでいいわ。

白銀を目指して強くなりなさい。

そう思うと、夕呼は自嘲の笑みをうかべた。前の世界では研究のために自分の親友の命すら捧げたというのに、こんな優しい感情が自分に残っていたのか……と。

そうこうしているうちに武が訓練を終え　ちなみに内容はヴォールク・データだった　シミュレーターから出てくる。それを見たみちるが号令をかける。

「敬礼！」

武が返礼をしたのを見て、夕呼は口は言う。

「どうだった、白銀の力は？」

その言葉に彼女たちは何も言えない。

と思っただらみちるが口を開いた。

「正直に言っ、夢を見ているかと思いました。

大佐の動きが再現できればBETAなど一網打尽でしょう」

夕呼は武を見る。

武が答えるという意味だろう。

「そう思っか？」

みちるは顔に出さないが、かなり興奮していた。

「はい。白銀大佐の動きが再現できれば、人類は滅亡などしないで  
しょう」

そう言っ、武は不敵な笑みを浮かべる。

「そうだ。伊隅の言っ通り、我々は戦わずして滅びはしない！  
人類は戦い続け、勝利し、生存し続ける！

紹介しよう。俺と博士が造り出した人類の新たなる力、新OS『X  
M3』だ」

これさえあれば武の機動が再現できると聞き、横浜基地が誇る戦乙  
女たちは歓喜するのだった。



## 第五話（前書き）

なんか支離滅裂に感じた感じがします……

## 第五話

『速瀬機コックピットに被弾。致命的損傷、大破』

『あ~~~~もう！何でよ!?!』

『ヴァルキリー1（伊隅）よりヴァルキリーズ。速瀬がやられた。  
ウィング・スリー  
鶴翼参陣でエネミー1を包囲する!』

『ヴァルキリー3（宗像）よりヴァルキリー1。

何なんですか？あの戦術機。  
見たことない機体ですね』

『知らん。副司令と白銀大佐が造ったと仰られていたが……』

『武御雷のようできて不知火のようでもある。しかし、どちらとも  
違う。』

何より武装で日本刀を装備しているとは……』

『ヴァルキリーマム（涼宮姉）よりヴァルキリーズへ。

エネミー1は前方約1000の地点で停止』

『ヴァルキリー1了解。聞いたな？このまま包囲する!』

『了解!』

『ヴァルキリー4（風間）よりヴァルキリー1。

エネミー1が見えました。でも……』

『何だ、どうした？』

『いえ、何というか……とにかく、映像を送ります』

『了解した……何だ、あの構えは？』

……居合い斬りでもする気か？  
全隊停止。様子を見る』

「やっぱり突っ込んで来ないか……」

武は飛燕の中で呟く。

仮想敵である A-01 は UNブルーの不知火を駆り、約 500 手前で建物の陰に隠れている。

「ハア……何でこんな事になってんだろうな……」  
数時間前

武は夕呼に呼ばれて 90 番格納庫に来ていた。  
狼牙の前に立っている夕呼に声をかける。

「夕呼先生、何ですか？」

「あ、白銀。アンタこれに乗って伊隅達と模擬戦してくれない？」

「は？」

いきなりとんでもない事を言い出した。

A-01が搭乗するのは不知火、第3世代型だ。

対して狼牙は第5世代機。やる前から勝負は見えている。

第一飛燕ならまだしも、狼牙は宙間戦闘用だ。

その事を伝えると……

「大丈夫よ。コレは飛燕の装甲を変えただけの戦術機でしょ。飛燕用の装甲は技術班に造らせたわ」

と笑いながら夕呼は言う。

だがしかし、飛燕だとしても第4世代だ。

これは簡単に言えばバトルライフル対マズケット銃くらい性能差がある。

「何で演習なんかするんですか？

それにここに隠した意味がないじゃないですか」

「飛燕を量産したくてね。帝国の方に打診したのよ。設計と技術提供は私とアンタでしたけど、造ったのは帝国技術廠でしょ？だから

……」

「だから、機体の性能を見せてみる……と？」

夕呼はその通りと言いたげに微笑む。

だが、まだ疑問が残る。

何故、量産する必要があるのか？

それから、他国　とりわけ、米国の諜報機関などに見つかったら

どうするのか？

「量産する理由はね、甲21号作戦と桜花作戦用に造るの。で、諜報機関に対してだけ……ま、見たきや見ればいいのよ」

「あの……先生？」

「顔に出てるわよ」

質問しようと思った事を全てを先に言われた。

まあ、量産目的は分かった。

しかし、諜報機関に見せてしまうのは如何なものか。

それを言うと夕呼はため息を吐く。

どうやら呆れているようだ。

「アンタねえ……飛燕は見た感じは普通の戦術機と変わらないわ。

人工筋肉を使ってるって以外は殆ど普通の戦術機と変わらないんだからね。

だから見ただけじゃ、単なる新型としか判断できないわ」

「でも、人工筋肉を使うつてのを感じかれて真似されたら……」

言った瞬間、武の目の前に星が飛び散る。

遅れて頭がズキズキと痛み出した。

どうやら夕呼が手に持っていた分厚いファイルで叩かれたようだ。

「痛い！マジ痛いですって！何するんスか！」

「ハア……これ造った時に色々特許取ったり、新聞に『人工筋肉の新しい使い道』とか掲載されたの覚えてない？」

「そりゃ、覚えてますけど……」

武達が過去　　と言つても今から言えば未来の話だが　　に飛燕を造つた時、色々騒がれた。

人工筋肉を戦術機に流用するのは画期的なものだった。

飛燕の登場まで戦術機はロボット、機械との認識が強かった。

まあ、それは間違いではないが、機械だとはやり動きがスムーズにいかない場合がある。

そこで武は、元の世界で見たアニメを元にして飛燕を考え出した。

そのアニメとは厳密に言えばロボットじゃなく人造人間だったり、パイロットが中学生の少年少女だったり、電源がないと殆ど動けなかったりする、社会現象を引き起こした某有名アニメだが、この際それは置いておく。

とにかく、飛燕の人工筋肉流用の考えは武が元の世界でのサブカルチャーを参考にしただけに、この世界の科学者が考えつく確率は低い。

「あれほどの騒ぎになるって事は誰も考えなかったって事だからね。つまり、今のところ飛燕は　　と言つより、人工筋肉を流用するって考えはアンタがいないと　　出来ないってわけ。　　X M 3の根幹もアンタの三次元機動だしね」

この世界は娯楽に乏しい。

だが、逆に武の世界でのサブカルチャーを元にしたOSだの戦術機だのはBETAの居ない娯楽に満ち溢れている世界　　元の世界を経験した武でないと考えつかないのだ。

実際、前の世界でX M 3を造った時はかなり話題になった。

「わかりましたよ。」

で、帝国技術廠からは誰が来るんですか？」

「あんたも知ってる人よ」

「技術廠に知り合いは一人しか あ、あつちは俺の事まだ知らないか。とにかく、俺が知ってる技術廠の人間って、まさか……」

「そう、そのまさか。巖谷榮二中佐よ」

#### 巖谷榮二

彼は帝国技術廠……正式名称『日本帝国陸軍技術廠』の第壹開発局副部長である。

斯衛軍のテストパイロットとしてF-4J改・82式戦術歩行戦闘機『瑞鶴』の開発に参加していた。

1986年に北海道矢別演習場で実施された模擬戦で当時の最新鋭機である米軍のF-15C『イーグル』を相手に瑞鶴で勝利したほどの腕前で、『国産戦術機開発の礎を築いた伝説の開発衛士』として名高い。

「巖谷のオッサンっすか……」

前述の通り巖谷榮二という人物は伝説となっているが、武にとつては後見人となっている姪の『篁唯依』と自分をくつつけようとする親バカでしかない。

正史では唯依はユウヤ・ブリッジスという人物とくつつく？が、この小説では恋愛原子核を謳っているため、そのような事はない。ユウヤファンの方がいたら申し訳ない。

#### 閑話休題

という訳で、武対A - 01の模擬戦が決定した。現在、夕呼と榮二は指揮車にて観戦をしている。驚いたことに、夕呼と帝国軍の仲は良好のようだ。前の世界に於いては仲が悪かったのだが、この世界に来てからは夕呼も積極的に帝国軍に技術提供などを行っているらしい。

「と、他人の事をきにしている場合じゃないな」

痺れを切らし、制圧支援の袴子が92式多目的自律誘導弾を放つ。

「おゝこれを撃ってきたかあ……」

のんびりと言う武であったが、次の瞬間に思いもよらない行動に出る。

何と袴子の方へと噴射滑走したのだ。

『なっ 』！』

これには袴子も驚いた。撃った相手に近づくとという事は被弾率もそれだけ高くなるということだ。

しかし、武は誘導弾をしゃがみ、体を捻って避ける。

大半が演習場にある廃墟に当たり爆発するが、数発残った弾は武を追いかける。

武はそれを引き付け……

「済まんな、袴子」

袴子の機体を羽交い締めにする。

袴子の目に映ったのは武を追いかけたのは誘導弾だった。

『風間機、機関部に被弾。致命的損傷。大破』

遙の声が聞こえた。

息を吐く暇もなく、網膜投影される『後方危険円錐域 敵機接近』の文字。

後ろを見ると美冴が長刀を振りかぶっている。

武はそのまま振り向きざまに振動刀（模擬刀）を一閃。

『む、宗像機、コックピットに致命的損傷。大破』

このままではまずいと思ったのか、残りが集結しようとする。

「させると思っただけ？」

また噴射滑走をし、近くにいた翔子、美穂、多恵、凜を斬る。

『あ、麻倉機及び高原機、築地機、七瀬機、致命的損傷。大破……』

遙の啞然とするような声が聞こえる。

それはそうだろう。

模擬戦が始まってからまだ十分も経ってないのだから。

残りはみちると茜。

みちるは焦っていた。

くそ！これがあの機体の性能と白銀大佐の腕という事か……！

言っておくが、A-01はただの部隊ではない。

夕呼直属の特殊任務部隊 エリートだ。

なのに、一機の戦術機にここまでやられるとは！

『ヴァルキリー1よりヴァルキリー5（涼宮妹）。私が前に出て近接戦を仕掛ける。その間に私ごとで構わん、大佐を撃ち落とせ』

『　　っ！了解！』

みちるは長刀を装備し、武に仕掛ける。

『ハアアアアア！』

後方で突撃砲を構える茜。

武が振動刀を構えた瞬間、何を思ったのかみちるは長刀を投げ捨てた。

そのままの背後に回り込み飛燕を羽交い締めにする。  
先ほど武が袴子にした事をやり返したのだ。

『　　今だ、涼宮！撃て！』

それを聞き、茜はフルオートで撃つ。

しかし……

『　　きゃあっ！』

武がみちるを一本背負いしたのだ。

これは滑らかな動きができる飛燕ならではだろう。

そして、茜が撃った弾は吸い込まれるようにみちるの背部へ。

『　　……伊隅機、背部に被弾。致命的損傷。大破……』

残るは茜だ。

流石に茜も今の武の行動をみて呆然としている。

五秒程度しかそうしてなかったが、武相手ではそれが命取りになる。気がついた時にはすでに時遅し。

目の前に肉薄した武が茜を袈裟懸けに斬ったのだった。

『……す、涼宮機、致命的損傷。大破。』

状況終了……』

こうして、公式には残らないが、世界初の第3世代戦術機と第4世代戦術機の模擬戦は8分53秒で武の勝利で幕を閉じた。

「いかがですか、第4世代戦術機『飛燕』は」

「いやはや、不知火も現状では劣っている機体ではないですが、これほど違うとは」

ところ変わって、指揮車。榮二が今の模擬戦の感想を言う。

「機体も素晴らしいですが、搭乗している衛士の腕もかなりのものですね」

「そうでしょう。」

彼は私自慢の衛士ですから」

笑い合う二人。

「その衛士とは会えるのですかな？」

「申し訳ありませんが、今回は見送らせていただきます。ですが、近いうちに必ず紹介いたしますわ」

「ほう、それは楽しみです」

何故、今回武は会わなかったのか。

その理由とはただ単に逃げたのである。

夕呼は飛燕を動かしているのは大佐で男性としか伝えていない。

榮二はそれを聞いて、歴戦の勇士を想像したが、武ほど若い人間だと知ると絶対に唯依とくつつけようと画策するはずだ。前の世界でもそうだった。

まあ、さすが恋愛原子核というべきか。

その恋愛原子核はといえば

「つつかれた」

207小隊の様子を見るため、教室に向かっていた。もうちよつとで教室に到着する……という場所で教室から

「何でそこで突出したのかって訊いてるのよ！」

「言ったとしても理解できない」

言い争う声が聞こえた。

今日は机上演習のはずだ。

「だから、そんな事をしたから部隊が危険にさらされたんでしょ！」

普通だったら、まりもが止めるところだが、腕時計をみると座学の時間は終わり、まりもは去った後のようだ。

「何をしているんだ、貴様ら？」

教室に入るなりそう言つと、全員が敬礼をする。

「外まで聞こえていたぞ」

武が言つと、皆バツが悪そうな顔をして俯く。

まあ、委員長と彩峰の喧嘩だろうけどな

そう思つた武は理由を訊ねる。

予想通り、机上演習でのいさかいが事の発端だった。

千鶴が王姫の上申を却下して命令を下し、慧がその命令を無視して突っ走り危うく全滅するところだったそうだ。

「はあ」

机上演習の結果が書かれた書類を見て一言。

「貴様ら衛士になるのをやめろ」

「「「「「！」「」「」

冷たく言い放つ。

「部下の上申を反映させない小隊長に命令無視をしておきながら理由を言わない隊員。場を収めるべき副隊長は自分勝手に動き、残りの隊員は右往左往するだけ。  
んな事で衛士になれると思っているのか？ あ？」

黙したまま下を向く207の面々。  
そこに闖入者が現れた。

「貴様らまだいたのか　っ！大佐！」

まりもだった。

武に気づき慌てて敬礼をする。

ちらりと一瞥し、武は一言。

「軍曹、こいつらの除隊証を書いておいてくれ」

「え？」

「こいつらは今の今まで喧嘩をしていた。ミスの擦り付けあいだな。こんな奴らが衛士になったんじゃ迷惑だ」

喧嘩をしていた……のところでもりもは鋭く千鶴達を睨むが、武に向かい彼女らを庇う。

「は、しかし、こいつらは特殊な人間で除隊証は……  
それに、除隊は早計なのでは？」

「特殊な背景があるのは俺も知っている。だが、任官してそれが関係あるか？」

それに軍曹は除隊は早計だと言ったが、俺はそうは思わんね。

こいつらは総戦技演習に一回落ちている。しかも今日と同じような理由でな」

「それはそうですが……」

「任官したら他の奴らはどんどん突っ込んでくるぞ。

榊首相の娘だろうが、彩峰中将の娘だろうが、珠瀬事務次官の娘だろうが、あのお方の身内だろうがな」

千鶴達は自分の身内の名前が出た瞬間、体をビクツとさせる。

「貴様ら仲間を信頼しているか？」

仲間っていうのはなお前達のように上辺だけの付き合いじゃない。横にいてこいつなら命を預けられるって思える奴の事を言うんだ。例えば、榊。彩峰が横にいて命を預けられるか？」

千鶴はチラリと慧を見る。

慧は無表情に千鶴を見ていた。

「いえ。何を考えているかわかりませんので……」

「だから、信頼できないか？  
じゃあ、貴様は彩峰の事を理解しようとしたか？」

ハツとする面々。

「貴様らは命を預ける以前の問題だな。

榊は彩峰の行動が理解できないから信頼しない。

彩峰は榊に理解されないから自分の行動理由を言わない。

それが切っ掛けでいつも喧嘩をするから御剣はいつもの事とたかをくくり場を治めない。

珠瀬は自分の意見が聞き入れられないと思い込み喧嘩を止めない」

暗い空気が立ち込める教室に明るい空気が乱入する。

「榊さん達遅いよ、私お腹ペコペコだよ？」

純夏だった。

彼女は特別プログラムで訓練を受けているため、今日は別々に訓練をしていたようだ。

「あ、武ちゃ……白銀大佐」

この世界の純夏は軍事教練を受けているため、幼なじみとは言え、公の場では武の事もちゃんと上官として接する。  
元の世界とは大違いだ。

「鑑訓練兵か……」

207小隊は今日限りで解散となる。

まあ貴様は特殊な人材のため、横浜基地に残るだろうが榊達は違う。  
別れをすませておけ」

「え？」

呆けた表情の純夏。

当たり前だ。仲間を呼びに来たらその仲間がいきなり除隊と言われたのだから。

「ああ、軍曹。榊達の除隊申請は俺が副司令に直接しておく。心配するな」

そう言うと、武は教室を出ていく。  
残ったのは悔しげに唇を噛む千鶴達と、今だ呆然とする純夏だった。

「大佐！」

教室を出た武をまりもが追いかけてくる。  
先ほどの件だろう。

「大佐、あの娘達の……」

「大丈夫だ。除隊申請なぞせんよ。  
ハツパをかけたただけだ」

ほっとしたようなまりも。

武に並び歩く。

まりもは思う。

白銀大佐はあの娘達の事を思って……

武がちゃんと千鶴達の事を考えていた事を嬉しく思う。

「まあ、これであいつらも変わるだろう」

「そうですね」

そうして因果の彼方では教官と教え子だった二人はPXへと歩いて行くのだった。

## 第六話

「なんとか形になってきたな」

武はシュミレータールームの管制室で咳く。

A-01にX M3の教導を開始して数日。

全員が基本的な戦闘行動を行えるようになってきた。

基本をおさえれば、応用的な戦闘も行えるため、あと一、二日もすれば実戦投入も夢ではない。

そう考えているとよこから声をかけられた。

「やっぱり凄いですね。大佐の考案したX M3は」

「いや、評価してくれるのは嬉しいが、これはあいつらの実力だよ、  
遙」

苦笑いしながらも言う。

これは武の本心だ。

X M3のお陰で即応力が三割増しになったとはいえ、たった数日間  
で応用動作一歩手前まで来たのだ。これはみちる達本人の実力に他  
ならない。

「あ、それと、207小隊の総戦技演習合格おめでとうございます」

「ああ、ありがとう」

昨日、千鶴達が総戦技演習に合格したと夕呼から通達があった。

あの日以来、207の面々とは顔を合わせていなかったが、あの時のハツパがいいように働いたようだ。

武の言葉を考えた冥夜が千鶴と慧の喧嘩を諫めるようになり、千鶴と慧は相互理解をしようと努め、王姫ははっきりと意見を言うようになった。

心配だったのは純夏と美琴だ。

美琴は退院して直ぐに演習だったのだ。

しかも、武と顔を合わせてすらいない。

まあ、あの性格だから武の存在にもすぐ馴染めるだろうが、チームメイトの変わりようには驚いた事だろう。

何せ今まで特殊な背景も相まって、不干涉主義を掲げていたのだ。

それがいきなりそれを撤回したのだ。

驚くなど言うほうが無理である。

それでも前述の通り美琴の性格が特殊なせいもあり、難なく受け入れたようだ。

そして、問題は純夏だ。

結論から言えば純夏は演習を受けていない。

その理由としては、まず表向き『特殊な人材』という事で夕呼が演習を免除させたのだ。

本当の理由は、まず純夏を強制徴兵という名で夕呼が『保護』している事だ。

そしてこれが重要な事だが、夕呼は純夏を衛士にする気はないという事。

ならば何故訓練校に入隊させたのか。

それは自分の目の届く範囲に留まらせておく事が一点。

二点目は衣食住を提供するため。

今の時代、一日三食食べられてちゃんと屋根のある所で就寝できるのは軍人くらいのものだ。

最後に、一度世界を救った武へのご褒美だ。

まあ、夕呼に衛士にさせる気は無くても純夏自身が衛士になりたが

ったのだが……

その点については、衛士特性が無い事にしてCP将校の訓練をさせる事で誤魔化した。

「佐……銀……」

「……………」

「白銀大佐！」

「うおっ！」

思考に没頭していると、大きな声が聞こえた。

横を見ると、少し憤慨したような遙が頬を膨らませている。それを見て、可愛いと思ったのは秘密だ。

「済まん。考え事をしていた。

で、何だ？」

「香月副司令から呼び出したいですよ？お迎えが来てます」

シミュレーター内を見るモニターではなく、別の監視モニターを見ると見慣れたウサミミが見えた。

霞だ。

「はあ………たく、先生ってばこっちの都合考えないんだもんな」

「ふふっそれが副司令ですからね」

愚痴を溢すと遙が当たり前の様に言う。

珍しく年相応の反応をした武を見て、きゅんときたのはこれまた秘密だ。

「遙、X M 3 動作応用過程Cを反復練習させておいてくれ」

「了解しました」

そう言うと、シミュレータールームを出て霞と一緒に副司令執務室へと向かう武であった。

「先生、何の用っスか？」

執務室に入ると夕呼はパソコンに向かい、キーボードを叩いていた。

「来たわね白銀」

「先生が呼んだんでしょうが」

無然としながらも、夕呼から差し出された十枚ほど束にされた書類を見る。

そこには『第4世代戦術機 飛燕 共同開発計画』とあった。

「なんスか、これ？」

言いながら一枚捲るとそこには

『国連軍開発責任者

白銀武

帝国軍開発責任者

巖谷榮二

総開発責任者

白銀武』

とあった。

「これって……」

漸くキーボードを叩き終えた夕呼が説明をする。

「どうやら早くも飛燕の開発に着手するようだ。」

それに先駆けて、武を帝国軍技術廠に出向させるという。もともと飛燕は技術、論理は国連軍 といつか、武と夕呼 が提供したが、組み立て及び材料調達は帝国が行なった。

つまり、双方の軍があつてこそ開発できた機体だ。

因みに国連軍独自で開発できない事もないが、ここは帝国に恩を売る事にしたらしい。

「よく帝国も乗りましたね」

「まあ第4世代戦術機つてのが魅力なんですよ。それに……」

夕呼は照れた様にそっぽを向く。

「今回は前の世界と違って、帝国とも仲良くやってるしね」

意外だった。

前の世界では、同じ日本人でも夕呼と帝国は犬猿の仲だったのだ。

これは帝国側が国連軍を米国の犬と罵つてした事が理由でもあるが、夕呼が傍若無人に振る舞っていた事にも起因する。

前の世界の経験が夕呼をどう変化させたかは知らないが、武はこの

変化を喜ばしい事だと思う。

帝国軍との共同作戦なんかもすんなりうまくいきそうだしな

次に気になったのは……

「総開発責任者は俺でいいんですか？」

「ああ、それも『ご褒美』の一部よ。

有名になればやり易くなるでしょ、いろんな事が」

「まあ、そうですね」

「……命を狙われる確率も高くなるけどね」

「うおおおい！」

ご褒美と聞いてちょっと嬉しかった武だが、次のボソツと呟いた言葉に突っ込みを入れる。

世界初の第4世代戦術機が開発されればどこかの『自分がナンバーワンじゃないと気がすまない国』なんかは暗殺に乗り出すだろう。

「ま、気をつけなさい」

「へいへい……っつーか命を狙われるご褒美って……」

げんなりとする武。

対して笑う夕呼。

世界が違い、階級が変わっても武はからかわれる運命にあるようだ。

「で、あとはね」

急に真面目な顔になる夕呼に武も気を引き締める。

「アンタ、前の世界では月詠中尉に絡まれたって言ってたわよね」

「ええ。確か……『死人が何故ここにいる』だったかな？  
そんな事を言われた記憶があります」

「心して聞きなさい。アンタの親……母親の方んですけど、九條の人間よ」

「……は？」

「だから、アンタの母親は五撰家の九條の人間なのよ」

五撰家とは1867年に成立した大政奉還の後に元枢府を設置した、  
煌武院、崇宰、斑鳩、斉御司、九條の五大武家を指す。

武の驚きは当たり前だ。

何故ならば、政威大將軍はこの五撰家の当主衆から一人選ばれる。  
世が世なら大名の家系だ。

「大変だったのよ？」

アンタはデータ上生きてるから国連軍に入隊させる時、斯衛軍がアンタの身柄を引き渡せって言ってきてね」

当たり前だ。

基本的に武家の人間は斯衛軍に入隊する。

それに九條縁の者が国連軍にいる事自体が問題なのだろう。

「ま、アンタの母親は結婚する際に駆け落ちしたらしいから、実家からは勘当されたらしいんだけどね」

その事もあって斯衛軍からは何も言われなくなったが、問題は斯衛軍の上部組織 城内省だ。

武家、しかも五撰家の人間が国連軍に入隊する事なぞ見過ごす訳がない。

どちらかと言えば日本はオルタネイティヴ？完遂を目指しているの  
で、武がオルタネイティヴ？に於いて最重要人物である事を伝えた  
上で夕呼自身が城内省へと赴き、土下座までして武の身柄確保を納  
得させた。

しかし、半ば無理矢理に九條縁の者を国連軍に引き留めているのは  
事実である。帝国側の心証は悪くならないのだろうか？

これについては、先ほど夕呼が言った通り帝国と良好な関係を築い  
た事で解決した。

オルタネイティヴ？を進行するにあたって帝国に有利に働きかけ、  
明星作戦に於いてG弾投下を阻止 結局は強行投下されたのでは  
あるが したりした事で帝国に『香月博士に任せれば大丈夫だ』  
という信頼関係を作り上げ、しかもその夕呼が土下座までしたのだ。  
これで納得しなければ信頼関係にひび割れが生じるので帝国も何も  
言わなくなつた。

「だから、基本的にアンタは自由にやれるわ」

「でも、普通五撰家の人間には、斯衛軍から警護が派遣されません  
か？冥夜みたいに」

「それなんだけどね、九條から待ったがかかったのよ。」

あちらが言うには、『香月博士を全面的に信頼して預けているのであるから、警護する必要なし』ってね。

まあ、御剣の場合は五撰家どころか悠陽殿下の妹だから、さすがに警護要員を派遣しないわけにはいかないって事で、相も変わらず月詠中尉がいるけどね」

「成る程ね……」

「かなり話が脇道に逸れたけど、ここからが本題。

アンタには三、四日間程度、帝国技術廠に行ってもらおうわ」

「それはいいですけど、何で……ああ！飛燕開発のためですか？」

「そうよ。あともう一つ理由があるんだけどね」

「もう一つ……？」

夕呼はそれに答えず、冷めた合成珈琲を飲みながら壁にかけてあるカレンダーを指し示す。

今日は十一月八日だ。

それを見て、武はピンときた。

「佐渡島ハイヴからのBETA南進……ですね？」

それを聞いた夕呼は、正解とでも言うように微笑んだ。

前の世界では同事件でA-01から戦死者が出て、ここで捕獲したBETAのせいで、XM3トライアルに於いてまりもが殉職したのだ。

捕獲もトライアルでBETA解放を指示したのも夕呼なのだが、この際それは置いておく。

閑話休題。

とにかく、武が飛燕開発という事で技術廠に赴き、BETAが南進してきた所を帝国軍と合同で撃破する。

これにより、帝国の横浜基地に対する信頼度は上がり、X M 3と飛燕の有用性も認知されるといふ事だ。

「あと、この派遣に際してアンタに二名、副官をつけるわ。ハイ、これ」

「なんですか、この書類？

……『鳴海孝之大尉』『平慎二大尉』……？」

夕呼から手渡された書類には副官の情報が記載されていた。ざっと目を通す。

「へえ、明星作戦の生き残りですか」

「そうよ。詳しい事は本人達から聞きなさい。

私が言っつていい事でもないしね……」

「了解しました。

で、いつから技術廠に行けばいいんです？」

「今日から」

「今日からっスか……は！？今日から!？」

驚いて時計を見ると、午後一時を指している。

こんな時間から行くとなると開発会議もできやしない。

「大丈夫よ。今日は顔合わせだけって巖谷中佐も言ってたから」

当たり前だが、榮二は武の顔を知らない。

加えて、開発スタッフなども紹介されるだろう。

そのため、本腰入れて開発に着手するのは明日以降になるのだろう。納得した武は技術廠に向かうべく、執務室を後にした。

自室で用意を済ませ、駐車場に行くと二人の士官がいた。

恐らく鳴海孝之と平慎二だろう。

「はじめまして、白銀大佐！自分は鳴海孝之であります！」

「自分は平慎二であります！」

二人は武の若さに驚きながらも敬礼を寄越す。

「鳴海大尉に平大尉だな。俺は白銀武、階級は大佐だ……って、知ってるみたいだな」

武の事を知っているのは恐らく、事前に夕呼から通達があったのだろう。

自分には当日になってから知らされたのに、この待遇の違いは何なのだろうか？

心の中で愚痴りつつも、帝都へ向かうべくハンヴィーに乗り込む。

孝之が運転席、慎二が助手席、武が後部座席だ。

「驚きました。まさか、白銀大佐がこんなにお若いとは思っておりませんでした」

運転する孝之のその言葉に武は苦笑する。

「よく言われるよ。」

まあ、今の訓練兵達と同一年だからな。

古参の兵たちに嘗められないようにするので一杯一杯だよ」

そのような雑談をしながらも順調に東京へと車を進めていたが、武は疑問をぶつける。

「君たちは明星作戦の生き残りらしいな？」

それを聞いた孝之と慎二の顔が暗くなる。

聞くところによると、訓練校を卒業し、新任として配属されたのはA-01連隊だった。

当時はまだ連隊規模であったA-01に於いて、これからBETAと戦う事を覚悟していた二人はある反攻作戦に参加させられる。

それが『明星作戦』だ。

同作戦に於いて二人は横浜ハイヴ突入部隊だったが、どこかの国が横槍を入れてG弾投下を行なった事で突入部隊は壊滅したというのだ。事前に国連及び帝国軍には、G弾強行投下を知った夕呼から最優先で撤退命令が発令されていたが、殆どの衛士がBETAの物量を前に撤退できず、突入部隊だったために無傷であった孝之達の上官達は、友軍撤退支援を行なった。

しかし、孝之は慎二を除く同期を全て殺された拳句にG弾によって上官達をも吹き飛ばされた。

上官達は最後まで友軍と新任で残っていた孝之達を撤退させようと

していたようだ。

見上げた兵達じゅうわいのである。

運が良かったのだらう。命からがら撤退ができた二人は、戦術機母艦の中で自分達が生まれ育った土地を、仲間ごと軒並み吹き飛ばす黒い光を見たそうだ。

どれだけ悔しい想いをしたのだらう。

明星作戦後、A - 01連隊は大隊規模まで縮小され、度重なる出撃で大隊は更に縮小されて今ではイスマミヴァルキリーズと孝之、慎二を残すのみとなった。そして孝之達は今どの部隊にも所属せず、完全に夕呼直轄の衛士となった。

今では他部隊での教導が主任務だ。

「そうか。辛い事を思い出させてしまったな」

「いえ……」

因みに二人が今回、武の副官として選ばれたのは、まず自由に動かせる人員である事、更にX M 3応用動作過程を全て修了している事が理由だ。

実は武も知らなかったが、A - 01より前に夕呼からX M 3の事を聞いていたようだ。

そして、自力でX M 3を操れるようになった。

これには武も驚嘆した。

エリート部隊であるイスマミヴァルキリーズでも、やっと基本的な戦闘行動を行なえるようになったのにこの二人は、先に訓練を始めていたとはいえ、もう戦線に出てもおかしくないほどにX M 3を身につけているのだ。

抜群の戦闘センスだらう。

そんな事を考えていると、窓の外には大きな城が見えてきた。帝都城である。

「あと二十分もすれば到着です」

「ああ、わかった」

武達が乗るハンヴィーは帝都城内にある帝国技術廠へと向かうのだ  
った。

## 第六話（後書き）

孝之と慎二は遙と水月より先に任官している設定のため、階級を大尉にしています。

前任大尉

伊隅みちる

後任大尉

鳴海孝之

平慎二

前任中尉

涼宮遙

速瀬水月

・

・

・

となっています。

## 第七話（前書き）

遅れてしまい、申し訳ありません。

中の設定は作者の創作であり、実際のものとは異なります。  
ご注意ください。

2011/9/14 指摘頂いた点を修正。

## 第七話

Other View

おじ様はいきなり何の用事でアラスカから呼びつけたのだろうか？  
確か、会わせたい人がいると言っていたが……  
不知火・弐型の開発も順調に進んでいるのだが、私が抜けても大丈夫だろうか？

いやいや、ブリッジスやマナンドルを信頼していないわけではない。  
そんな事を考えていると、おじ様がいる応接室が見えてきた。  
一度、深呼吸をしてからノックする。

「入れ」

直ぐに返事があった。

おじ様の声だ。

「篁 唯依中尉、入ります！」

Other View End

孝之が運転するハンヴィーは、あちらの誘導員に従ってするりと駐車場に停車した。

しかし、帝都城は広い。今いる技術廠及び駐車場は、昔で言う二ノ丸にあるが、天守閣がある本丸までかなり歩かなければいけないようだ。

まあ、今日は天守閣に用は無い……というか、許可が無いと入れな

い。

しばらくしてから技術廠から案内員が走ってきた。

17、8歳の少女だ。

「お待たせしました。案内を務めさせていただきます、帝国陸軍技術廠第壹開発局所属、黒鉄 椿少尉です」

「国連軍横浜基地所属白銀 武だ。  
本日はよろしく願います」

「同じく、国連軍所属鳴海孝之だ」

「同じく、平慎二だ。よろしくな」

椿は今回来る人間がかなり腕の良い衛士と聞いていたので、武達の若さに驚いているようだ。孝之と慎二はまだしも、武は同年代にか見えない。

同時に三人の階級章を見ると、一番若そうに見える武の階級が大佐である事にも驚く。

ここにいる人間で、一番位が高いのだから。

「やはり、俺が大佐である事に驚いているな？」

椿の表情を読み、武は微笑みながら言う。

「は……いえ、そんな事は……」

「まあ、周りの反応には慣れたよ。

恐らく、黒鉄少尉と近い年だしな」

「失礼ですが、お年を伺っても……？」

「ん？今度の12月で18だが？」

これには流石の孝之と慎二も驚いた。何せ今の訓練兵と同じ年なのだ。驚くなど言う方が無理な話である。

「っと、話し込んでしまったな。案内を頼めるか、黒鉄少尉？」

「は……失礼致しました！  
では、こちらです」

椿に案内され、三人は帝国技術廠本部へと足を踏み入れたのだった。

「はじめまして、私が巖谷栄二です」

椿に連れられ、三人が応接室に入ると、そこには栄二がソファに座っていた。

武達が入室するなり立ち上がり、大きな傷がある強面の外見とは裏腹に人の良さそうな笑みをつかべ、右手を差し出す。

「はじめまして。自分は……」

「聞いてますよ。」

香月博士の懐刀、横浜基地の天才児『白銀 武』大佐殿ですね？」

武が握手に応じ、自己紹介をしようとすると夕呼に貰ったのだろうか

か、何かの資料に目を向けながら言う。

「で、そちらは？」

今度は武の後ろに控える二人に目を向ける。

「は、自分は横浜基地所属、鳴海孝之大尉であります！」

「同じく、横浜基地所属、平慎二大尉であります」

二人 孝之と慎二は改めて敬礼をする。

「まあ、二人は私の副官だと思って貰っていいですよ」

「左様ですか」

「しかし、巖谷中佐。貴方の方が年上ですし、敬語は使わなくても……」

「いえ、そういう訳にはいかないでしょう。

大佐殿の方が階級が上ですから」

そう、軍隊では階級が全てだ。

訓練校の教官が軍曹と定められているのも意味がある。

昨日まで「腰抜け」「役立たず」「カス」……等々、ボロクソに言っていた教官が、いざ少尉の階級章をつけただけで、直立不動で「Yes sir!」と言うようになるのだ。

新兵はこの時程、階級を意識するという。

余談ではあるが、階級の後に『殿』と付けるのは、帝国陸軍のみだ。海軍は『殿』とつけるのは失礼に値するとの意識が強いからに他な

らない。

これは本来『殿』が、目下の人間に対する敬称であるからだ。これは実際の旧帝国軍で用いられた事柄だ。

「……まあ、いいでしょう。」

これが、新型戦術機の資料です。

どうぞ、お納め下さい」

「はい、拝見させていただきます」

少し分厚い資料を手渡す。

最初は普通に見ていた栄二だが、段々と手の動きが早くなる。

20ページ程の資料を5分程度で読み終えた栄二は、しばらく目を瞑り思考に耽る。

「……いやはや、これほどとは……」

カタログスペックだけでも凄まじいものがありますな」

「ありがとうございます。」

記載されているスペックは、ごく一般的な衛士でのデータです」

それを聞いて栄二は目を見開く。

「なんと……！」

ではエースと呼ばれる衛士が搭乗すれば……」

「お察しの通り、カタログスペック以上の戦闘が可能です。」

実際、シミュレータで私が試したところ、不知火の一個大隊を軽く殲滅できましたから」

これは事実である。先日、従来の戦術機との差をデータ化するためシミュレータで模擬戦を行なったのだ。

これはゲームでいうエンドレスアタックの様なもので、武が撃墜されるか、故意に止めない限り無限に敵機が現れるというものだ。その際の武のスコアは、撃墜107機。

連隊の規模は非戦闘員合わせて約560名なため、ほぼ連隊殲滅といってもよい。

書いていてなんだが、余りのチートに呆れてしまう。

「……大佐殿」

「はい？」

今まで俯いていた栄二が顔を上げる。

そしてあるうことが……

「なっ……！い、巖谷中佐！？」

あるうことが、土下座をしたのだ。

「本当にありがとうございます！」

いや、この気持ちは言葉にできません！

この戦術機が普及すれば、どれだけの衛士が……どれだけの若い命が、救われることでしょう！

このような素晴らしい機体を開発していただいた大佐殿に、全人類を代表して御礼申し上げます……！！！」

栄二の言葉には涙が混じっていた。

それはそうだろう。

今は技術廠にいるとはいえ、栄二はもともと凄腕の衛士だ。

戦場では誰にでも死が訪れる。

部下が死んだ事もあつただろう。

目の前でBETAに喰われる人間も見ただろう。

避難する民間人が蹂躪される様を見ただろう。その悔しさはどれほどのものだろうか？

その悔しさをバネに『不知火・弐型』の開発に着手した。

だが、その弐型も『全人類の統一』というプロバカンダに使われるべく、国連軍（実質は米国）に接收され、今はアラスカで開発が進められている。

しかし、日本の機体を米国が開発するという事もあり、思うように進まない。

日本は近接戦闘主体だが、米国は遠距離主体など、齟齬が生じているので、当たり前といえば当たり前だ。

そこに横浜基地から、新型戦術機の開発をしたいと打電があつただ。

他の国連基地ならいざしらず、横浜基地は日本の味方だ。

しかも新型戦術機を提案したのは自分と同じく現役衛士だという。

その新型戦術機のスเปックも問題ない。

栄二は武に感謝してもしきれないのだ。

「い、巖谷中佐！顔を上げて下さい！」

武の言葉に、漸く栄二は頭を上げる。

「いやはや、恥ずかしいところを見られましたな……」。

ところで、この戦術機の名前は何というのでしょうか？

カタログには『飛燕（仮）』となっていました」

実は、元々飛燕は不知火の改良型として開発着手したのだが、未来の世界に於いて、弐型が普及したことにより、不知火系の戦術機の

開発が凍結され、やむ無く『飛燕』という名前になったのだ。その事を思い出し、一瞬遠い目をする武であったが、直ぐに我に帰る。

「ええ、飛燕というのは先行試作機の仮称です。正式量産型の名は……」

不意に扉がノックされた。言葉を遮られた武は訝しげな顔で扉を見る。

「ああ、失礼。」

私の部下が来たようです」

栄二の入室を促す言葉に、鈴が鳴るような綺麗な声が聞こえてきた。

「篁 唯依中尉、入ります！」

入って来たのは、黒髪の日本美人だった。

「紹介いたします、大佐殿。」

彼女は篁 唯依中尉。

斯衛軍に所属していますが、現在は国連軍アラスカユーコン基地に出向しています」

「そうでしたか。」

はじめまして、篁中尉。

俺は国連軍横浜基地特務隊所属の白銀だ。階級は大佐だが、まあ仲良くやろう」

「は！よろしくお願い致します、白銀大佐！」

と言ひ、陸軍式敬礼をする唯依だったが、武が大佐だということに怪訝な顔をする。

「何だ、篁中尉その顔は？」

上官に対する態度ではなかったせいだろう、栄二が厳しい表情で唯依を睨む。

「っ！も、申し訳ありません、中佐！」

「謝る相手が違つたろう、篁中尉？」

極端な反省癖があるのだろう、唯依はかなり小さくなっている。

「まあまあ、巖谷中佐。私は気にしてませんから」

苦笑いしながら武が仲裁に入る。

「しかし……」

「こんなに露骨に疑問を持つ人も久しぶりでしてね。ちよつと嬉しいですよ」

「嬉しい……？」

「ええ。私が横浜基地で陰口を叩かれているのは知らないでしょう？」

「陰口……ですか？」

「はい。曰く『白銀大佐は香月博士のコネで大佐になった』  
曰く『実は元々脱走兵であり、香月博士に拾われた』等々……」

「何と……！」

地位が上がったり、権力を持つにつれて 妬みや嫉みといった感情  
を向けられるのは当然だ。

しかも、若くして大佐なのだ。

大佐といえば、参謀長や大隊を率いるくらい階級が高い。

なのに十代の、まだ少年と言っていていくらいの武が大佐なのだ。  
不満もあるだろう。

「もっと酷いのもつとありましたけどね」

「酷い……と申しますと？」

「……女性の前で言うような内容ではないので……」

「私は構いません、大佐。

おっしゃって下さい」

「……わかりました。

曰く『香月博士を犯して言うことをきかせている』

曰く『訓練兵の面倒を見ているが、それはフリで訓練兵を調教して  
性奴隷にしている』……等ですね」

「何と言う……！」

栄二の顔が怒りに染まる。栄二にとって武は自分に希望を与えてく  
れた、云わば恩人だ。

その恩人を悪しき様に言われるのが我慢ならぬのだろう。

「まあ、有象無象の言葉を気にしても仕方ありません。それより話を進めましょう」

「あ、ああ……そうすな。

それでは、この戦術機の名前は……？」

ここで武はチラリと唯依を見る。

唯依は武の視線に戸惑う。

何か、大佐の気分を損ねる事をしたか……と。

まあ、それは杞憂なのだが。

「ユーコン基地の方々には恨まれそうですが……」

その言葉に、栄二と唯依は首を傾げる。

戦術機の名前を言っただけで、何故恨まれるのか？……と。

「新型戦術機……その名は……」

そして、武は厳かに新型戦術機の名前を発表した。

「不知火系戦術機正統後継機……」

『不知火・参型』  
です」

帝国軍兵士の手記(前書き)

お久しぶりです。

短いですが、とりあえず投稿です。

## 帝國軍兵士の手記

あの日、私たちは地獄の真つただ中にいた。

いつもと変わらない面子で、いつもと変わらない装備を持ち、いつもと変わらない任務をこなしていた。

しかし、一つだけ違うことがあった。BETAが来襲したのだ。

私は機械化歩兵部隊に所属し、新潟の第二次絶対防衛線近くの基地を警備していた。

……そして、11月11日の早朝。コード991が発令された。基地の惨状は最悪の一言だ。

戦術機が磨り潰される音。

ナニかが潰れる音。

それに伴う悲鳴、悲鳴、悲鳴……

勿論私も戦った。

携行型ミサイルで。

それが無くなれば、バトルライフルで。

それが無くなれば、サブマシンガンで。

それが無くなれば、拳銃で。……だが、ヤツらはそれすらも無視して進軍する。

とうとう目の前で隊長が された。

私に降りかかる生暖かい血。

白灰色をした 漿。

それヲみて……ワタしは……

……ニゲダシタ

気がついたら、戦術機用格納庫の隅で震えていた。

周辺は滅茶苦茶だ。

倒れたパソコン。

散乱した工具類。

怒号を発する整備兵たち。

基地上層部が混乱しているのか、本来退避しているはずの非戦闘員整備兵が残っていた。

私は彼らを護るためにいるのに、まるで処女を捨てる直前の小娘のように震えていたのだ。

そんな私に近づく一人の整備兵がいた。精悍な顔をした30代前半の私より年が一回りほど違う男性だ。

「どうした、こんな所で」

彼は私を責めるでも無く、世間話をするかの如く、優しく話しかけてくれた。

もしかしたら、私にこびりついた隊長の……を見たのかもしれない

し、失禁しているのも勘づいたのかもしれない。

「貴方は私を責めないんですか？」

私は震えながら彼に問う。

その疑問は当然であると思う。私は『兵士』対して彼は『整備兵』先にも書いたが、私は『護る者』であり、彼は『護られる者』だ。彼は今の惨状が見えない様に煙草を取り出してふかす。

「何故、お前さんを責めねばならん？」

「だって、私は敵を前に逃げ出して……」

「……まあ、軍人としてはいかんな。だがな、人としては当然だと思っぞ？」

「……え？」

「あんなもん見たら逃げたいわな。  
BETA  
俺だってそうさ」

「でも！私は兵士……」

「それにな、恐怖を忘れたら敵には勝てんよ。恐怖するから警戒する。警戒するから敵を学ぶ。

敵を学ぶから弱点を見つける。

そして、弱点を見つけるから勝てるんだ」

眼から鱗だった。



かぶる。

……しかし

「ヒイギヤアアアアアアアアアアアア！」

う、腕があああああ！！！」

一瞬にして右腕をもがれていた。

訓練を受けていない彼の恐怖心は幾ばくか。

痛みも尋常ではないだろう。しかし、彼は残った左手にスパナを握り、またもや闘士級に攻撃をしかける。

「これ以上、若い奴らを死なせてたまるかああああ！！！」

突撃した彼は、私の目の前で頭を握り潰された。

私は情けない！

戦うために訓練を受けた私が何もできないでいたのに！

整備兵である彼が！

何の訓練も受けていない、一般人と変わらない彼が！

武器も持たない彼が！

勇敢にBETAに立ち向かったのに！

私は震えていることしかできなかった……！！

それからの事は覚えていない。

気がついたら、白銀《はくぎん》の、武御雷と不知火を合わせたような戦術機から降りてきた国連軍所属の衛士に保護された。

これ以降の記述は無い。

これを書いた三日後、敵前逃亡罪のため刑が執行され、彼女は十九

年の短い生涯を終えた……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2342p/>

---

因果の彼方より救世主は来たる

2011年10月21日06時39分発行